私のサッカー観戦の楽しみ方と高校時代の体育祭の思い出

札幌市医師会
新札幌パウロ病院
高階（たかしな）　俊光（としみつ）

小生は高校時代、サッカーに夢中になり、ポジションはハーフ（今のミッドフィルダー）でレギュラーでした。高校サッカーの大ファンでもあります。以来事あるごとにテレビ観戦しています。日本でのワールドカップ（以下、Wカップ）もたまたまチケットを入手して見に行きました。

野球は得点が８対７のルーズヴェルト・ゲームが面白いと言われていますが、私がサッカーで面白いと思うのはどちらかが先制点をあげてからの両チームの選手の顔の表情とプレーから両チームの精神模様を観戦するのがとても大好きです。

一般に強豪チームが先制していても追いつかれると、強いチームであればあるほどその精神的なダメージが大きく、１対１になって追いついたチームは押せ押せムードで活気づき精神的に優位に立ちます。そして次の１点をどちらが取るかで試合を決定づけることが多いと思いますが、これを象徴するようなゲームがWカップでありました。Wカップサッカー2010年南アフリカ大会で４強をかけてオランダと優勝候補のブラジルが対戦しました。前半はブラジルが押して１対０とリードしていました。後半にオランダが１点を返し１対１に、その後精神的に焦ったブラジルがオウンゴールで２対１となりオランダが逆転しました。その５分後に動揺したブラジルの選手がオランダの選手を踏みつけ一発退場になりました。10人になった「王国」が誇るブラジルの守備陣がバランスを崩し、一気に崩壊して全く反撃できませんでした。これは強豪が追いつかれて動揺した結果です。

一般に過去の対戦で２対０での勝者は強いチームで、同じ相手に対し組みやすしの気持ちを持っており、敗者は痛手を負ってダメージを引きずっていると思います。

2026年１月11日に第34回全日本高等学校女子サッカー選手権は神村学園高等部（鹿児島）－柳ヶ浦高校（大分）の決勝でした。インターハイの九州予選では神村学園高等部が柳ヶ浦高校を２対０で破っています。前半は神村学園高等部が圧倒的に柳ヶ浦高校を押しまくり、柳ヶ浦高校の選手の顔は苦渋に満ちていました。しかし柳ヶ浦高校が前半の終わりにわずかなチャンスを生かし、コーナーキックから前に走り込んだ選手がヘッディングで１点を入れました。後半に入り柳ヶ浦高校は得点の入った時の歓喜がそのままプレーに表れ鉄人28号のように別の強いチームに生まれ変わり（別人28号）どこまでも走り回って対等な試合運びで得点を許しませんでした。これに対して神村学園高等部は時間とともに焦り出し両者の顔の表情が逆転していました。守り切った柳ヶ浦高校が初優勝しました。神村学園高等部は九州予選で勝っていて心のスキがあったかもしれません。この両選手の顔の表情と精神模様は見ていて実に面白かったです。

小生が高校１年の時、体育の時間はいつも隣のクラスとサッカーの試合です。しかし１度も勝ったことはなく全く歯が立ちませんでした。それもそのはず隣のクラスには猛者（もさ）連中の中に動物的勘を持つ体格のいい身長の高い超超高校級の怪物選手１人がいたのです。体育祭があり高校１年生の我がクラスは２、３年生のチームを撃破し、決勝に駒を進めいつも練習している隣のクラスと決勝となりました。結果はいつものごとく２対０の完敗でした。怪物１人にやられたのです。この体育祭で優勝が怪物のクラス、準優勝が我がクラスと１年生のクラスが優勝と準優勝を飾ったのです。体育のサッカーでいつも怪物のクラスに鍛えられた結果でした。その選手は当時サッカーの大学選手権で優勝した東京教育大学（現筑波大学）に入学と同時に準レギュラーになりました。その後タバコの問題でサッカーをやめたと聞いて本当にガッカリしたものです。あれだけの選手はもったいないと思ったものです。今では考えられないことと思うのですが、なぜか当時グランドの拡声器スピーカーから歌手森進一氏のデビュー曲「女のためいき」（昭和41年）が大きなボリュームで繰り返し流れていた中でのサッカー試合でした。そのくらい大ヒットしていたのです！当時は全く違和感がありませんでしたが、今考えてみるとそのアンバランスが実に懐かしいです。どうしたことか「女のためいき」を聞きながらのシュートは１本も入りませんでした。入ってくれと祈る気持ちのPKも外してしまいました。通常得点率７～８割のPKではキーパーは右か左に予想して飛ぶので、キーパーのポジションの真ん中に蹴り込めばよいと小生は思うのですが、高校生の多感な時期、PKを外したのは「女のためいき」のせいではなく足元がちょっと狂っただけのことと思います！？半世紀以上も前のことが愉快過ぎて振るっている古き良き時代でした。

今でもサッカー中継を都合でどうしてもテレビ観戦できない時には、女房に録画を撮ってもらいスコアを聞かず観戦するのを常としています。

約60年前のサッカーで明け暮れていた体育の時間は、後期高齢者となった今でもサッカー観戦を楽しむ者として素晴らしいタイムスリップしたような思い出になっています。